



## Veritas No.36(2007.12.13)

目次 (敬称略)

<大航海時代への旅ーポルトガルの大学都市コインブラー>

真栄平 房昭 (図書館長)

<特集 本と旅人>

Yolanda Alfaro Tsuda (英文学科)

金田 知子 (総合文化学科)

金沢 謙太郎 (環境・バイオサイエンス学科)

井出 敦子 (院長室職員)

今西 聡子 (文学部院生)

江口 倫子 (文学部院生)

稲本 好美 (文学部院生)

<研究室から>

Wai Ling LAI

<史料室から>

佐伯 裕加恵

<チャプレン室から>

長谷川 千枝

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (9) >

松村 昌家

<図書館からのお知らせ>

図書館

無断転載を禁ず

## ＜大航海時代への旅ーポルトガルの大学都市コインブラー＞

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

ポルトガルのリスボンから西へ30キロ、ヨーロッパ大陸の最西端にある「ロカ岬」を訪れたことがある。150メートルもある断崖に立つと、眼の前には真っ青な大西洋が広がり、十字架の記念碑に「ここに地果て、海始まる」と刻まれている。印象深い言葉である。この言葉は、ポルトガルの有名な詩人カモンイスの叙事詩の一節で、「大航海時代」の歴史を彷彿とさせる。

「大航海時代」は、15～17世紀にヨーロッパからアフリカ、アジア各地に展開した。その最先端に生きた人間たちの記録を紹介したい。世界史上の大転換期のドラマが刻みこまれたそれは『大航海時代叢書』と呼ばれ、第1巻「航海の記録」にはコロンブスの書簡をはじめ、ヴァスコ・ダ・ガマや、アメリゴ・ヴェスプッチらの航海記の全訳が収録されている。この興味深い大航海シリーズ全巻が大学図書館に所蔵されているので、一読をおすすめしたい。

さて、数年前の春のこと、私はリスボンから北へバスにゆられて2時間半、コインブラ（Coimbra）に着いた。人口9万人ほどの小さな町だが、歴史の中で果たした役割は大きい。イベリア半島北部のキリスト教世界と半島南部のイスラム世界を結ぶ商業都市として栄えたこの町は、11世紀にイスラム教徒の支配から奪回された後、カスティーリャ王国およびポルトガル王国の首都となった。

コインブラは、丘の上の大学を中心に発展した文化都市である。政治のリスボン、商業のポルトに次ぐポルトガル第3の都市だ。町の旧大聖堂（→写真①）は、ポルトガルでは数少ないロマネスク建築として知られている。



① コインブラの旧大聖堂



② コインブラ大学の時計台

コインブラ大学は、ローマ教皇の認可を得て、1290年にポルトガル国王によって創設され、パリ大学、オックスフォード大学などに次いで、ヨーロッパで最も古い大学のひとつである（→写真②）。「鎖国」以前、海外に渡った日本人たちの中に「ミゲル・ミノエス」という洗礼名のキリシタンがいた。彼はコインブラ大学で勉強し、日本人として初めて哲学の学位を与えられ、さらにローマのイエズス会で学び、司祭となった（H.チースリク『世

界を歩いた切支丹』春秋社、1971年)。

現在のコインブラ大学は、文学・法学・医学・理工・経済など8学部で2万余人の学生たちが学び、にぎやかなキャンパス風景であった。一方、旧大学の静かな中庭にはバロック様式の図書館がある。1724年にポルトガル国王ジョアン5世によって建てられた貴重な文化遺産だ。内部の壁は金箔塗りの階層式書棚になっており、医学書、歴史書、科学書、哲学書など25万冊の貴重な書物が保存されている(→写真③)。天井画はイタリアの影響を受けたりスボンの芸術家たちの手になる。何より驚かされるのは、この蔵書は現在でも学生たちの求めに応じて貸し出されているという。歴史文化遺産を大切に保存するだけでなく、現代に生きる教育資産として活用していることに感心した。



③コインブラ大学の旧図書館

図書館から外に出て、サンタ・クルス修道院前の広場へと向かった。その周辺はとてにぎやかで、市民や学生がオープンカフェで楽しげに談笑している。広場でひと休みし、気のおもむくまま、町中を歩き回った。旅の楽しみの一つは、未知の土地で見知らぬ風景や人間に出会う瞬間である。だが、思わぬ落とし穴もある。うらぶれた路地に迷い込み、方角を見失ってしまったのだ。人影の無い路地裏を1時間近く歩きまわり、ようやく黒い帽子をかぶった老人に出会った。そこで、片言のポルトガル語で道をたずねるが、うまく通じない。「困ったな」、見知らぬ異国の地で迷子とは・・・結局、なんとか自力で元の広場へ戻ることができ、ホッと胸をなで下ろした次第である。こうした旅先での「迷子」体験も今から振り返ると、妙に懐かしい思い出の一コマだ。

ポルトガルへの旅は、大西洋に面した「ロカ岬」の雄大な風景や、コインブラ大学の壮麗な図書館の記憶とともに、私にとって忘れがたい体験であった。

## <特集 本と旅人>

Yolanda Alfaro Tsuda 英文学科准教授

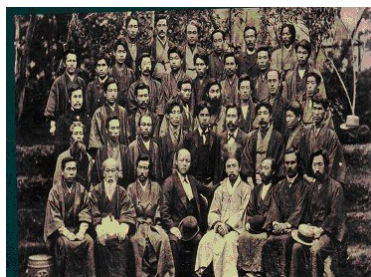
山下弦橋(げんきち)編著『信じて生きる』日本基督教団元浦河教会（発行）、2003年。  
荒井良夫『開拓団「赤心社」の系譜と澤茂吉 神戸から浦河へ来たピューリタン』北海道科学文化協会（発行）、1994年。



北海道に集団移住したキリシタンが開拓した牧場

『信じて生きる』は、北海道浦河郡荻伏町にある元浦河（もとうらかわ）教会の創立120周年記念誌です。明治維新から20年経とうとしていた1886（明治19）年に、当時の神戸教会から発展し、集団移住して、北海道開拓に携わる人々のために造られた教会でした。私は本書に、ピューリタン精神による開拓者の歩みを学ぶことができました。驚いたことに、私の夫の曾祖父津田仙とも、神戸女学院とも不思議な歴史繋がりがあることも学んだのです。

仙は幕府外国奉行の通弁（外交通訳者）として渡米した、明治日本における最初のプロテスタント受洗者のひとりでした。農学者として、日本最初の農学校（学農社農学校）を経営した、『農学雑誌』や『北海道開拓雑誌』の発行人でした。青山学院大学の源流となるいくつかの学校の創設に貢献しました。津田塾大学創立者梅子の父でもあります。



仙の没後 100 周年ということで 2008 年 4 月 26 日には、青山学院が主催し、千葉県佐倉市（仙は元佐倉藩士）及び津田塾大学が後援する記念会が企画されています。その準備のための私の研究過程で、偶然ある HP に、元浦河のクリスチャンコミュニティ建設に仙の助言があったのを見つけたのです。津田家関係者の間でも、これまでは知られていないことでした。



澤茂吉先生の像の前に立つ赤心社社長、澤恒明氏

そこで 2007 年 8 月、私はふたりの研究者とともに、札幌から自動車ですら 3 時間ほどかけて、日高地方にある「赤心社」を訪ねました。私たちは元浦河教会責任役員である澤恒明氏に温かく迎えられました。

名刺交換の後、彼は私におっしゃったのです。「私の祖父、茂吉は神戸ホーム（現神戸女学院）で国漢と書道を教えていました。祖母、貞（のち改めて天以）はその第 1 期卒業生でした。」また、元浦河教会初代牧師、田中助（たすく）は津田仙が設立した学農社農学校で学んだ人で、その妻、栄はやはり神戸女学院の同窓生だとのことでした。

次に、赤心社記念館に案内していただきました。すると、そこにはなんと、「C. B. デフォレスト宣教師を迎えての記念写真」が展示されていたのです。デフォレスト先生の訪問は 1901（明治 34）年、当時 22 歳の時でした。1903 年には仙台で日本語を勉強し、翌々年から神戸女学院教師となったのですが、彼女と、北海道開拓に従事していた何人も女学院卒業生との間にこのような交流があったというわけです。

澤氏は私に、『信じて生きる』と『開拓団「赤心社」の系譜と澤茂吉』を贈呈して下さいました。この 2 冊は、聖句「信じて生きる」（マルコ 11・20-26）を北海道に集団移住して深い信仰を实践した初期クリスチャンと、神戸女学院と、外国から日本へ移民している私とが、思いもかけず素晴らしい出会いを得たことの証しです。



元浦河教会の前での信者たちの記念写真

### 旅先で出会った〈宝物〉

海外旅行に出かけると、必ず現地の本屋に立ち寄る。最近よく行くナイジェリアやシエラレオネなどの西アフリカ諸国では、本屋に並んでいる本は日本のそれとは大違いだ。現地で印刷された本は紙の質が悪い上に、乱丁、落丁、汚れは当たり前。しかも本の種類も極端に少ない。だから関心があるテーマについて書かれた本に出会うと、埃まみれの本でも〈宝物〉を手に入れたような気分になる。

今夏も、シエラレオネで〈宝物〉に出会った。シエラレオネは1991年から2002年まで激しい内戦が繰り返された国で、いまなおその傷跡が各地に残る。首都フリータウンでさえ、電気も水道もガスもほとんど供給されていない。本は道端に並んでいる露店で売られていて、ほとんどが中古だ。

そんななか、どうしても現地のローカル言語であるクリオ語を勉強したくて、教科書を探した。「初級のクリオ語の教科書はありますか」と訊くと、現地の小学校で使われていた本を出してくる。もちろん誰かのお下りの本だ。しかし小学校で使われている教科書はすべてクリオ語で書かれていて、発音も分からないし、何よりも英語の対訳がないために内容がよく理解できない。

いろいろな露店をまわっても見つからず、諦めかけていたところ、一人の男性が「これはどうだ」とPeace Corps-Sierra Leone Krio Language Manualという一冊の本を差し出してきた。A4サイズの200頁以上もあるどっしりとしたテキストで、クリオ語と英語が併記されている。Peace Corps（アメリカ版青年海外協力隊のような団体）がシエラレオネに赴任してきたボランティアたちのために作成した中古のテキストブックだった。言い値の半分以下に値切って、それでも2500円もの大金を出して購入した。現地の物価で考えるとかなり高額だが、日本では入手がほぼ不可能な代物だから仕方ない。

ホテルに帰って早速テキストを開いてみると、最初の頁に「1985年改訂」とある。内戦が始まる前に出版されたものかもしれない。頭がタイムスリップして、20年以上も前にこの本を手にした誰かに思いをめぐらす。所々にあるドッグイヤー（気に入った頁を折ること）や書き込みを見て、胸が少し躍る。クリオ語を学びたいというその人の思いが、20年以上の歳月を経て、この中古テキストを通して私に引き継がれてきたように感じた。

しかし残念なことに、シエラレオネから帰国後は、仕事や雑事に追われてクリオ語の勉強はほとんどできていない。この旅先の〈宝物〉と格闘できる日がいまは待ち遠しい。

金沢謙太郎 環境・バイオサイエンス学科准教授

著者：パトリック ジュースキント（池内紀訳）

タイトル：香水 —ある人殺しの物語—

出版社：文春文庫

出版年：2003年（原作は1985年）

2006年に映画化されて再び話題となった小説。舞台は18世紀のフランス。パリのセーヌ川沿いの魚市場は活気と悪臭に満ちていた。大きなお腹を抱えた女が突然倒れ込み、無造作に捨てられた魚のはらわたの上で赤ん坊を産み落とす。大声で泣き出した子の名前は、ジャン＝バティスト・グルヌイユ。彼は生まれながらにして、類まれな才能を備えていた。それは、世の中にあるすべてのものを嗅ぎ分ける恐ろしく鋭い臭覚である。

11歳になったグルヌイユは皮なめし職人のもとで働き始める。黙々と仕事をこなす彼に週末に1時間だけ自由時間が与えられた。彼は、ワインや香辛料、野菜、花、そして香水などを目で見るよりももっと正確に鼻で確かめた。ある夜、グルヌイユはこの上ない微妙で、こまやかな匂いに出会い、胸が激しく鼓動する。その匂いの源をたどっていくと、プラムを売り歩く赤毛の娘だった。彼はゆっくりと背後から娘に近づき、頭上からかぶさるように彼女の立ち上る匂いを嗅いだ。グルヌイユはこれほどまでの幸福を覚えたことはなかった。しかし、娘が振り向いたとき、とっさに彼女の首に手をかけてしまう。

以来、グルヌイユは少女の香りを再現した天国の香水を創り出すことに人生を賭ける。そして、シャンジュ橋の上に店をもつ調香師バルディーニの弟子入りを請う。グルヌイユはそこで蒸留法を教わる。しかし、蒸留法ではひそかに抱いている匂いの夢を実現できないと知り、もっと高度な技術が学べるグラスへと旅立つ。グラスの町で再びあの恋焦がれていた匂いと再会する。香りの主は、金持ち商人の娘、赤毛のロールであった。

グラスで脂に香りに移す冷浸法を学んだグルヌイユは、究極の香水づくりに着手する。美しい娘たちが次々と殺されていった。グルヌイユは犠牲者の全身に脂を塗り、脂に移った香りを一晩かけて抽出していく。彼の最後の望みはロールの香りだった。危険を察知したロールは町から逃げ、グルヌイユは風の匂いを頼りに彼女を追う。果たして、彼は天国の香水を完成できるのか――。

私がこの本を読んだのは、今年の夏。中東ドバイからパリへ向かう飛行機の中だった。原作は20年前に発表されていて、日本でも今年映画が上映されたが、どちらも見逃していた。ふだん小説をあまり読まないが、その旅の目的がグラスの香水工場の見学だった



ので、どうしても読んでおきたかった。パリ経由でニース・コート・ダジュール空港に着く。そこからバスで約1時間揺られた山の中にグラーヌはある。遠くに地中海が見える眺めのよい町だ。旧市街の細い路地に迷い込むのもまた楽しい。ちょうどミサが行われていたノートルダム・デュ・ピュイ大聖堂は重厚な石造りにステンドグラスがよく映えていた。

この町には、ガリマール、フラゴナール、モリナールといった香水メーカーの老舗が軒を連ねる。工場の一つを訪れた際、女性の調香師から冷浸法（アンフルラージュ）について説明を受けた。動物性の脂を塗ったトレーに花びらをのせ、花びらに含まれる精油を脂に吸着させて、その脂から精油を分離純化させる方法である。マリーゴールドやバラなどの花から精油を抽出するのに使われている。小説の中で、グルヌイユは殺人を犯した後、冷浸法を使って一晩がかりで「仕事」をやり遂げていた。しかし実際のところ、そんなに早く人間の匂いが抽出できるのだろうか。冷浸法で使う動物の脂肪と人間のそれとは混ざったりしないのだろうか。聞く勇気をもたなかったが、もしそんな質問をしていたら、調香師はいったいどんな顔をしたのだろうか。

追伸) 後日、小説をもとに作られた映画「パフューム」をDVDで鑑賞した。プレミアム版では本編とは別に、映画のメイキング解説がふんだんに盛り込まれている。特に、衝撃のラスト・シーンについて。その要となったのは、バルセロナを拠点とするヨーロッパで最も有名な舞踏団の一つ、ラ・フラ・デルス・バウスだ。彼らは数百名のエキストラとともに細かいリハーサルを重ね、彼らの見せる強烈な感情だけでなく、時代物の厄介な服を脱ぎ、最後には抱き合うという誰も見たことがないセンセーショナルなラスト・シーンを作り上げた。

井出 敦子 院長室職員

#### 『真田太平記』から広がる世界

ふと出会った小説に夢中になり、その舞台となった土地を訪ねる計画を練りながらあれこれと想像を巡らし、実際に一つ一つ旅を重ねながら再び小説の世界に思いを馳せる、そしてこれほどの楽しみを与えてくれた小説との出会いに心から感謝する、そんな経験をしたことはありませんか。時代・歴史小説作家、池波正太郎(1923-1990)の『真田太平記』は私にとってまさにそうした作品です。



1974年から1982年まで、実に9年に亘って『週刊朝日』に連載されたこの小説と、私は朝日新聞社刊の新装版全18巻の単行本で出会いました。たまたま父が読み終えてテーブルに置いた第1巻を手にとったその時から、次の巻に手が伸びるのを止めることが出来ず、夜を日に継いで読破したのを思い出します。甲斐の武田家滅亡から徳川幕府成立に至る大きな時代のうねりと共に、信濃の小豪族真田一族、昌幸とその息子である信之・幸村の三者三様それぞれの生き様がなんとも魅力的に描かれています。それぞれの信念に従って別の道を歩むことになっても（天下分け目の関ヶ原の戦いで、昌幸と幸村は西軍に、信之は東軍に付いた）、お互いが父を息子を兄を弟を、どこか深いところで信頼し認め合っていたのだという著者の視点の素晴らしさのなせる業でしょうか、読み終えてからも興奮は醒めることがなく、何かに憑かれたように心は旅の舞台へと誘われて行きました。

真田氏発祥の地、信州真田町に残る真田氏本城跡から見た巒の如くに連なる山々、昌幸の壮大な夢を今に伝える上田城址、上田市郊外独鈷山前山寺の庫裏で「くるみおはぎ」をいただきながら眺める塩田平、信之が豊臣家滅亡後に移り住んだ真田十万石の城下町松代（長野市）に遺されたゆかりの品々。

関ヶ原の戦いの後、昌幸と幸村が幽閉された紀州九度山の真田庵を初めて訪ねたのはうららかな春の日、真田家ゆかりの宿坊、高野山の蓮華定院に宿泊したのは初夏でした。

幸村奮闘の跡を求めて、大阪城から足を伸ばして、「真田の抜け穴」が残る三光神社へ、終焉の地と伝えられる安居神社へ。

2006年10月、大阪城天守閣で、大阪城・上田城友好城郭締結記念として特別展、「真田幸村と大阪の陣」が開催され、久しぶりに旅にはまだまだ続きがあることを思い出しました。次はどこへ出掛けましょうか。

●池波正太郎 『真田太平記』 1-3 （『完本池波正太郎大成』 18-20） 講談社 受入済）

今西 聡子 文学部院生

旅先で出会った本 ～ジャッカ・ドフニの『ゲンダーヌ』～

かれこれ20年以上も前のことになります。北海道の網走にある「ジャッカ・ドフニ」という資料館を訪れたことがありました。ジャッカ・ドフニというのは、ウィルタ語で「大切な物をしまっておくところ」という意味です。ウィルタは樺太（サハリン）の先住民族なのですが、ガイドブックに「アイヌに差別されてきた民族」というような意味の説明があり、「へえ～」と思って行ってみたのです。

アイヌは明治時代に「土人」から「旧土人」に「格上げ」され日本国籍を与えられましたが、ウィルタは戦後まで日本国籍を持たない「土人」であり、にもかかわらず（だからこそ？）第二次世界大戦末期には樺太の北緯50度線の国境付近で諜報活動に従事させられました。彼等はトナカイを飼育する遊牧民族で、北緯50度線を自由に往来していたことから、軍に利用されたものと思われます。そして、敗戦後はスパイ容疑でシベリアに抑留され、彼等のうち何人かはソ連領となった樺太には戻らず、日本を「引き揚げ」の地に選んで北海道に渡って来たのです。私がそのことを知ったのは、ずっと後になってからのことです。当時は、ただ「へえ～」と思って行っただけでした。

素朴な山小屋風の建物の中に入ると、白樺やトナカイの皮などで作った民具がたくさん並べられていました。それらの民具をぼんやり眺めていると、60歳くらいのシャイな感じの小柄なおじさんが遠慮がちに近づいてきて、静かな口調で一つ一つ説明してくれました。どうやら、おじさんはこの資料館の館長さんのようでした。

「ジャッカ・ドフニ」を出る時、ふとカウンターの下を見ると、そこに『ゲンダーヌ』という本が置いてありました。「ゲンダーヌ」とは何のことやら意味もわからず眺めていると、おじさんが静かな声で、はにかむように「私、それ私です」と言ったことを、今でもよく覚えています。

ゲンダーヌさんこそ、戦争中に樺太で諜報活動に従事させられ、10年近くもシベリアに抑留された後、網走に引き揚げてきたウィルタ民族のお一人だったのですが、当時の私はそんなことは全く知りませんでした。日本語の読み書きもままならないゲンダーヌさん。その本は、口述によるゲンダーヌさんの自伝でした。

それから一年も経たないうちに、ゲンダーヌさんはこの世を去りました。脳出血による急死だったと聞いています。やがて20年余りの歳月が流れ、私は神戸女学院大学の大学院で北方史を研究することになったのですが、「ジャッカ・ドフニ」でゲンダーヌさんにお会いした時は、自分が将来北方史を研究することになるとは夢にも思っていませんでした。もっと色々お話をお聞きしておけば良かったと、今も悔やまれます。あの時ゲンダーヌさんが手渡してくれた『ゲンダーヌ』（現代史出版会、1978年）という本は、私の北方史研

究の「記念碑」として、今も大切に手許においてあります。



ウイルトのイルガ (文様)



資料館ジャッカ・ドフニの許可を得て撮影

江口 倫子 文学部院生

チャールズ・ディケンズ『オリバー・ツイスト』北川梯二訳  
上・下巻 角川文庫 2006

19世紀イギリス文学の作家チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-1870)の初期の作品に『オリバー・ツイスト』(Oliver Twist, 1837-1839)がある。この作品は、当時の救貧院の悲惨な状況に対して、ディケンズが世論に訴え批判を盛り上げようとして執筆したと言う目的がある。私はここに少年オリバーの、“本当の自分”との再会のための旅があるのではないだろうかと思う。

救貧院で産み落とされた直後、すでに孤児となってしまったオリバーは、身元不明のまま教会区の人々の手によって救貧院で過ごす。あの有名な台詞「おねがいします、〔おかゆが〕もっと欲しいんです」にあらわされるように、満足な食事も与えられずオリバーは空腹と、理不尽な扱いを受ける。奉公に出された葬儀屋での虐待に耐えられず、とうとう新たな土地、「困ることがない…」というロンドンの街を目指す旅に出る。知る人もなく、わずかなお金のみを持ち、たった一人で歩き続ける絶望的な徒歩旅行であった。疲労と空腹がピークとなった時、大人のような格好をした少年に出会い、彼の導きにより夜の闇に紛れとうとうロンドンへと到着する。そして連れて行かれたのは、泥棒の巣窟であった。主人のボブ・フェギン (Bob Fagin) は身寄りのない少年を集め、少年たちに窃盗をさせていたのである。ここでもオリバーは懸命に努力し、なんとか窃盗の技を身に着けるが、いざ実行に移した時、捕まってしまう…。ここから、物語が大きく展開して行く。次々にありえないような出来事が起こるが、オリバー少年の“真の姿”“真の生まれ”ゆえに、それは運命に導かれるようである。

人生とは旅であるといえるだろう。オリバー少年の旅は、流浪のようなものであるが、その中でさまざまな人に出会い、学び、感謝し、悲しみ、驚き、さらに苦しみを味わいながらも、オリバーは一步一步自分の足で目的地へと歩いていったのである。旅には、楽しい旅ばかりではないだろう。時には悲しみにくれる旅も必要である。しかし、オリバー少年は本性的に備わっている“純真さ”を失うことなく、その悲しく辛い旅の中でも、何事も決してあきらめなかった。そして、決して自分に妥協をしなかった。これこそ、人生の旅においてももっとも重要で、もっとも難しい「旅行規約」ではなからうか。(参考 松村昌家編『ディケンズ小事典』研究社出版、1994.)

稲本好美 文学部院生

シュトルム作・関泰祐訳 『みずうみ 他四篇』、1999、岩波文庫

旅先での楽しみは食事・人間観察・風景観賞、そして読書だ。

今年3月、北関東へ旅行した。大阪から夜行バスに乗り、東京駅に早朝6時半頃到着。到着予定よりかなり早かったようで、人影はまばら。飲食店も開いていない。とりあえず、JR常磐線が接続している上野駅に向かった。

上野駅に着くと開店している店があったので朝食をとった。7時を過ぎると人が増え始める。ざわざわとホームに響く声の中に、北関東弁の独特のリズムを聴くと胸が高揚してき

た。

朝食後、東京国立博物館へ。その後は周辺をブラブラと散策した。

夕方、17時発の特急電車「スーパーひたち号」へ乗るためホームに向う。途中、手持ちの鞆に本が入っていない事に気づいたので駅構内の本屋で短編集を一冊買った。それがシュトルムの『みずうみ 他四篇』である。長編小説を買っても良かったのだが、読書に夢中になると電車からの風景を見逃してしまいそうなので短編を選んだ。

17時ちょうど上野を出発。同じ車両には結婚式帰りの親族一同や家族連れが乗車しており、非常ににぎやかな雰囲気だった。

水戸・日立といった大きな街に着くまではひたすらのどかな風景が広がる。だんだん眠くなってきたところで、さきほど購入した本を開いた。表題になっている小説「みずうみ」は、老学究ラインハルトが少女エリーザベトとすごした少年時代を回顧することで展開してゆく。「純粹」の一言につける愛らしい二人の幼少期、心が常に寄り添い合っていた青年期、けれども最後は結ばれる事なく終わってしまった彼ら。（エリーザベトはラインハルトの友人と結婚する。）幻想的ともいえる澄んだ印象の文体の中に、なんともいえない悲哀感が残る。そんな作品である。

読み終わると、降りる駅が近づいていた。風景はあいかわらず民家と畑が広がっている。眠気はもう覚めていた。鞆に荷物を入れなおし、降りる準備をする。駅に着いたらまず何を食べよう。私の頭の中は「みずうみ」の読後感と、食事のことでいっぱいだった。これこそまさに旅の醍醐味である。

## <研究室から>

### A Fundamental Problem in English Academic Writing

Wai Ling Lai 心理・行動学科客員教員

Many students who study academic writing in English may think that the difficulty in producing a satisfactory piece of (academic) writing is primarily due to the limitation to express one's ideas and thoughts in English. But this is a mistake! Although a basic understanding of the grammar and punctuation is important to producing a satisfactory piece of writing, writing involves much more than knowing how to write in English (this is why native English speakers also have difficulties in writing). This fact is obvious indeed if you think of a writing task in your native language. Suppose that you are a Japanese native speaker and have mastered a good level of understanding of Japanese grammar and punctuation. Do you think that you will have no difficulty at all in carrying out the writing task in Japanese? The answer is almost definitely NO.

The difficulty in producing a satisfactory piece of writing, in my opinion, is fundamentally due to a lack of proper training in thinking skills. No doubt, a piece of writing can be one of many kinds (e.g. essay, report, book review, project, dissertation, thesis, etc), and it can take one of many forms (e.g. chronology writing, description writing, compare/contrast writing, summary writing, analysis writing, evaluating writing, etc). But by and large, all the unsatisfactory writings can be categorized into either writings that are poorly organized or writings that fail to deliver a coherent argument; hence they are unable to convey what is in a writer's mind in a clear, coherent and persuasive manner. These symptoms of unsatisfactory writings - i.e. the lack of a clear structure and coherent argument, in my opinion, reflect that the writers lack the ability of knowing how one thought can be correctly and incorrectly connected with another thought.

Indeed, the problem of thinking skills manifests itself in most parts of our everyday reasoning. For example, consider how you can explain why you cannot drive your car to work today. Of course there are countless reasons for why you cannot drive your car to work today (e.g. it could be that your car was stolen or

borrowed by someone else, etc). But for illustration purpose, let's just suppose that the reason is that your car was stolen. I guess that many of you would think that such reason alone provides a sufficient ground for the claim - I cannot drive my car to work today (in the sense that if you were asked "why you cannot drive your car to work today", you would promptly answer that "because my car was stolen" without any hesitation). But if we look into the connection between the reason and the claim more carefully, we shall see that the former cannot be a sufficient ground for the latter because the former is not directly connected with the latter. Without going into details, in order for the reason - My car was stolen - to be correctly connected with the claim - I cannot drive my car to work today, we have to include two other reasons, namely (1) I have only one car, and (2) I have to go to work today.

To be sure, what has been shown here by no means suggests that we should adopt a more careful and comprehensive way of reasoning in our everyday life. There are well-established social factors that explain why everyday reasoning is conducted in such a causal way. However, if such reasoning style were to be adopted in a formal writing, then the writing could hardly be clear and persuasive about what the writer wants to convey. Unlike everyday reasoning, reasoning in writing has to be more careful and comprehensive. Any piece of writing that fails to show how the writer's thoughts are correctly connected is likely to be an unsatisfactory piece of writing.



## <史料室から 一礼拝今昔一 >

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院はキリスト教の学校です。普段はミッションスクールということは意識されないことも多いと思いますが、キリスト教学という授業があって必修になっているので、学校がミッションスクールであることを知らない人はいないでしょう。中でも最も特徴的なのは毎日礼拝があることです。中高部では毎朝8:30から、普通の学校で言えば朝礼として行なわれています。大学では授業の間に15分間チャペルアワーがあります。レポートを書くためにしぶしぶ出席しているという人もいらっしゃると思いますが、神戸女学院にとって礼拝は大切な学業の一部になっています。今、大学の礼拝ではソールチャペルを使ったり、講堂を使ったりしていますが、20年ほど前までは講堂でのみ行なわれていましたので、クリスチャンでない私は、ソールチャペルは神聖な場所、クリスチャンしか入ることのできない場所と思っていました。このように礼拝と一口で言っても、時代によって少しずつ様変わりしてきています。そこで今回は礼拝にまつわるエピソードを学院史の中から拾って、ご紹介したいと思います。

昔の礼拝は全員参加でした。同窓生の方々、特に戦前学校を卒業された方々にお話を伺うと、何も言われなかったけれど、みんな出るものだと思っていたとおっしゃいます。そして礼拝中はとても静かだったということです。戦前の岡田山の講堂での礼拝では、全校生徒の人数が少なかったため、中高大、全員が講堂に入れました。自治会の大学部の会長が全体を総括していて、礼拝のとき、私語が多いと見ると、大学自治会長が、講堂正面の右側（今、パイプオルガンが置いてあります）のドアをそっと開けて、くぼみに立って指を口に当ててシーッと、静かにと制せられたこともあったとか。またこれより前の時代、山本通時代の中高部の礼拝では、講堂入場から退場まで静かに静かに靴音もないほどだったと思い出される方も。

ところで、ある方に伺ったところ、学生時代、「愛神愛隣」についての説明を一度も聞いたことがなかったといいます。けれども、礼拝の度に「愛神愛隣」を目にして、自然にあれは何のことだろうと考えます。神を愛するって何だろう、隣人を愛するってどういうことだろうと。考えるうちに自然にしみ込んでいったと。そしてこれが校則であるに違いないと。（学院標語は岡田山のキャンパスでは講堂の正面入口の上にあります。山本通のキャンパスでは講堂の中に入った正面の壁にありました。）

クリスチャンでない人にとって礼拝は自分に関係ないもの、時間の無駄と思われるかもしれません。けれども神戸女学院で学ぶメリットの1つはキリスト教の伝統、心の教育に

あります。第4代院長のソール先生（ソールチャペルはこの先生の名前から名付けられています）は、学生たちを性急に教会に結び付けようとは思いません、とおっしゃいました。クリスチャンを育てたいと思っていた宣教師の先生が、です。それは、表面的にクリスチャンを作るのではなく、心の教育としてキリスト教を用いる、ということになると思います。私達の先輩方はそうした先生方の願いどおりにリベラルアーツとキリスト教の教育を受け、そこから多くを学び取って卒業し、社会で活躍を続けています。

昔と同じように、というわけにはいきませんが、礼拝でのお話は宗教的なものばかりではありません。ソールチャペルであるときには、あの荘厳な雰囲気味わうためにでも、チャペルアワーに足を運んでみてはいかがでしょうか。何かを得られるのではないのでしょうか。

### <チャプレン室から—礼拝について—>

長谷川 千枝 チャプレン室職員

アドヴェントが始まり、クリスマスが近づいてきました。街にもリースやツリーが飾られています。神戸女学院大学でも、ツリーやリースが飾られ、ポインセチアの鮮やかな赤と緑の色彩にクリスマスへの期待がふくらみます。教会ではその他に、アドヴェントクラウンツとよばれる4本のロウソクが、1週終わるごとに灯されます。12月24日の夜には各教会で礼拝がまもられ、キリスト者だけではなく、近隣の人々とともに、祈りがささげられます。神戸女学院大学でも、12月21日にクリスマス礼拝がまもられます。クリスマスは最も強くキリスト教の文化や習慣にふれることができる季節かもしれません。しかしそれは日頃まもられている礼拝（チャペルアワー）の延長線上にあることです。今日はその礼拝について少し考えてみたいと思います。

礼拝は、英語に訳せば service、worship とするのが一般的でしょう。Service は、ホテルやレストランでも使われますが、「仕える」という意味で、元来は「神に仕える」ことを指しました。Worship は worth(価値)と同じ語源をもち、「価値あるものを認める」ことを意味します。また聖書に目を向けると、礼拝は、旧約では「働く、仕える」を語源とするヘブル語「アーバド」、新約でも「奉仕、仕える」を意味するギリシャ語の “latreia” が使われています。

何となく、礼拝の意味がつかめてきたかと思います。礼拝は儀式や所作のことではなく、真実に価値あるものを認めて、それに仕え、奉仕することです。神と呼ばれる、わたしたちを超える、永遠の存在に思いをはせ、そこから自分という小さな存在を見つめなおす時間です。対象は、個々の信じるものによって違うかもしれませんが。しかし神戸女学院が創立以来、心を尽くしてきた祈りを学生、教職員が共にし、神戸女学院という学舎と建学の精神を通して一つになるこのひとは、時代を超える大きな器であり、わたしたちの人間としての豊かさをいっそう深めてくれることでしょう。

神戸女学院は学院の永久標語として「愛神愛隣」を掲げています。「愛する」とは、自分の全てをもって他者に「仕える」ということです。礼拝が「仕える」という意味をもつように、日々の生活でも、隣人に仕え、また支えてもらう中で、喜びと悲しみを分かち合う関わりを造れたらと願っています。

クリスマスは楽しいイベントです。同時に、主イエスが互いに仕え合うことを伝えるためにこの世にこられたことを覚える、キリストの香りにふれる機会でもあります。大学のクリスマス礼拝やまた近隣の教会でまもられる礼拝に出席し、その大切な意味を分かち合うひと時を過ごされますよう、お奨めしたいと思います。

## <ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (9)>

### 作中人物への鍵—その5 (『コニングズビー』に関して) >

松村 昌家 大手前大学名誉教授

『コニングズビー』を主人公の人格形成を主題としたビルドゥングズロマンだとすると、シドーニアはその点で最も重要な役割を担った人物だといえよう。

本シリーズ第6回で述べたように、イートン校を卒業したコニングズビーは、ノッティンガムへの旅の途中、ダービーの森の宿でシドーニアと巡り合い、「経験」よりも「若さ」こそ偉業の原動力であることを教えこまれる。



ライオネル・ネイサン・ド・ロスチャイルド roschild

「経験は... なるほど君にとっても僕にとっても、何百万の人にとっても宝であるに違いない。しかし想像力豊かな心にとっては、それは一文の価値もないものです。偉業をなし遂げたのは、ほとんどの場合、若さなのです... 英雄たちの歴史は若さの歴史です」(第3編第1章)

シドーニアは、ユダヤ系イギリス人で「世界中の金融市場を支配する最高の実力者」を父親にもつ。そして父親の死後は、「ヨーロッパにおける最大の遺産を相続することになる」(第4編第10章)

H.P. メンデスが作った『コニングズビー』における主要人物への鍵によると、このシドーニアはA. ド. ロスチャイルド・オヴ・ネーブルズとなっており、のちの作品『タンクレッド』に登場するシドーニアに関しては、ライオネル・ネイサン・ド・ロスチャイルドをモデルとしてあげているが、この違いがどういう根拠によるものであるのか、不可解である。両方ともライオネル・ネイサン・ド・ロスチャイルドを原型として創造された人物だと考えるほうが、妥当であろう。

その理由の第一は、シドーニアがユダヤ系イギリス人であることが強調されていること。そして第二は、上に述べた父子関係である。

ライオネルの父親はネイサン・メイアー・ロスチャイルド（1777 - 1836）、フランクフルトでロスチャイルド財閥の基礎を築いたマイアー・アムシェル・ロートシルト（英語読みではメイアー・アンセルム・ロスチャイルド）の5人の息子のうちの3男である。

ネイサン・ロスチャイルドは1797年にイギリスに移住して帰化（1804）、ロンドンに商社を開いてヨーロッパ金融界の大勢力となった。ワーテルローの戦では伝書鳩を使ってナポレオン軍の敗北を知り、ロンドン株式市場で証券投機を行って巨万の富を得た。長男のライオネル・ロスチャイルドは、その莫大な全財産——文字どおり「ヨーロッパにおける最大の遺産を相続する」のである。

とはいえライオネル・ロスチャイルドが即シドーニアだというわけではない。シドーニアの中にわれわれが見るのは、ヨーロッパ金融界の王者としてのロスチャイルドというよりは、知性、思想、言論、品格等、あらゆる面で人を引きつける魅力を備えた人物として理想化されたロスチャイルド像である。それには多分にディズレイリ自身の自画像も織り込まれているといえるだろう。

ディズレイリがライオネル・ロスチャイルドと個人的に親しみ、折にふれてディナーをともにしていたことは、モニペニーの『ディズレイリ伝』第2巻にも述べられているとおりだが、なかでも注目すべきは、1844年5月（日付は不明）、姉のセアラあてに書かれた手紙の次の一節である。

ポンソンビー卿は「シドーニアにすっかり魅せられ」ているので、私たちは今度の日曜日にライオネル〔・ロスチャイルド〕の家で、みんなで食事をすることにしているのです。いわばシドーニアのために、そのモデルとなったライオネルの家で祝賀会を開いたということになる。シドーニアとライオネルとの関係を決定的に物語っていると、言えるのではないか。

それから3年後、ライオネル・ロスチャイルドは、政治的な問題に絡んで、世の注目を集めるようになる。

1847年に総選挙が行われたとき彼は、ジョン・ラッセルとともにロンドン・シティからホイッグ党员として立候補し、見事当選した。しかし国会議員にはなれなかった。ユダヤ教徒に対しては、「議員無資格」（ディスアビリティズ）の規則が課せられていて、「宣誓形式」を踏まなければ、議員資格を認められなかったからである。議席に着くためには、「キリスト教徒としての真なる信仰に基づいて」宣誓をしなければならなかったのである。

1830年以來1850年まで、下院は5回にもわたってユダヤ人のためにこの宣誓の方式を変える法案を通過させたが、その度ごとに上院はそれを否決、同じパターンがくり返されること10回目にして、1858年ようやく決着がついた。

ライオネルが初当選して以来11年目。その間補欠選挙を含めて、総選挙が行われるごとに当選を果たし、ついにくだんの宣誓を唱えることなしに、下院議員の席に着けるよう

になった。ライオネル自身の忍耐もさることながら、選挙区民のねばりによって綴られた選挙史の一コマだったのである。

\* ベンジャミン・ディズレイリ・コレクションは神戸女学院大学図書館本館に所蔵しています。

### <図書館からのお知らせ>

#### ●クリスマス特別展示『聖書の世界』

図書館本館閲覧室では、今年もクリスマス特別展示『聖書の世界』と題して、「三大ケルト装飾写本」と称されるものの中から、「ケルズの書」と「リンディスファーン福音書」、そして世界初の活版印刷物である「グーテンベルク聖書」を、12月21日まで展示しております。いずれも複製版ですが、緻密で美しい装飾を、十分に楽しんでいただけたらと思いますので、この機会にぜひご覧下さい。



リンディスファーン福音書